

タイトル	「歴史を歴史によって克服する」：エルンスト・トレルチの 歴史主義 についての考察
著者	塩濱，健児； Shiohama, Kenji
引用	
発行日	2018-03-20

氏名・(本籍地)	しおはま けんじ 塩濱 健児 (北海道)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博(文)甲第4号
学位授与の日付	平成30年3月20日
学位授与の条件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	「歴史を歴史によって克服する」 —エルンスト・トレルチの《歴史主義》について の考察—
論文審査委員	主査 教授 安 酸 敏 眞 副査 教授 森川(大森)一輝 副査 教授 テレント・アイトル

## 論文内容の要旨

塩濱健児氏の本論文は、ドイツの神学者＝哲学者エルンスト・トレルチの思想体系における「歴史主義」(Historismus)の意義を究明し、かつそれとの密接な関係において、その<sup>キャッチワード</sup>標語と見なされてきた有名な成句「歴史を歴史によって克服する」(Geschichte durch Geschichte überwinden)(KGA 16, 1098)の真実の意義を、文献学的ならびに解釈学的手法を駆使して読み解こうとしたものである。論文は、序章、4章14節、終章、そして巻末資料「トレルチにおける「歴史化」概念の用例」から構成されている。

序章は、①本論文が取り組む「研究課題」、②本研究で用いられる「研究方法」、そして③「論文構成」について、簡潔に述べている。

第一章では、トレルチにおける「歴史主義」の概念の特質を明確化するために、まず「歴史主義」の概念史の批判的検討がなされ、トレルチの「歴史主義」——著者はこれを通常のものとは区別するために、二重括弧に入れて《歴史主義》と表記する——が「歴史化」(Historisierung)の概念と相即するものであることが示される。しかるのち、「歴史化」の概念の豊富な用例分析を通じて、トレルチの《歴史主義》が「自己回帰的な性格」(25頁)をもち、いわば「みずからの尾を噛むウ

ロボロスに象徴されるような一種の円環構造を有している」(同上)、と主張される。

第二章では、「歴史化」概念との絡みにおいて、トレルチが自らの「神学的方法」(GS II, 729)と喝破する「歴史学的方法」が、「批判」(Kritik)、「類推」(Analogie)、「相関」(Korrelation)という三つの原則(思考原理)に立脚することを示したのち、通常の二次的文献では見落とされている「第四の思考原理」の存在に着眼し、プロテスタンティズムに淵源する「人格性と主体性」(Persönlichkeit und Subjektivität)の原理が、トレルチにとって信仰的次元あるいは超越的・形而上学的次元への開放性を保証するものとなっている、との卓見が披露される。しかるのち、神学への歴史学的方法の徹底的適用によって生ずる、「キリスト教の絶対性」と「キリスト教の本質」の問題が詳細に論じられる。

第三章では、「歴史主義の危機」と称される事態がいかなるものであるかが叙述され、それを克服するための学問的対処として、トレルチが独自の歴史哲学体系を構想／構築するさまが、「普遍史」(Universalgeschichte)と「現在の文化総合」(die gegenwärtige Kultursynthese)という二大理念を主軸に描かれる。また第四章での議論を効果的に遂行する準備作業として、トレルチの歴史哲学において大きな重要性を有する、「個性」(Individualität)と「発展」(Entwicklung)の概念についても論じられる。

第四章では、「歴史を歴史によって克服する」というトレルチの有名なモットーの勝義を究明すべく、世界のトレルチ研究の大御所であったトゥルツ・レントルフの透徹した研究と、わが国における最新のトレルチ研究書である小柳敦史の著書『トレルチにおける歴史と共同体』と対峙しつつ、「歴史化」概念に関する掘り下げた用例分析やトレルチの著作の広範な渉猟作業を通じて、まったくオリジナルな解釈を打ち出す。著者は世界の先行研究において一度も指摘されてこなかった「脱歴史化」(Enthistorisierung)の概念を探り当て、この概念の入念な分析を通じて、トレルチの「歴史化」概念は——よってもって彼の《歴史主義》は——、「「歴史学化」と「脱歴史化」の循環性と再帰性とを併せもつ概念」(70頁)である、と主張する。著者によれば、トレルチはかかる「《歴史主義》の立場に徹することによって、《歴史主義》を常に更新していこうとする」(同上)のであり、そこに「歴史を歴史によって克服する」というモットーを読み解く鍵がある。トレルチは歴史から規範を獲得するという課題を、「歴史的生の流れを堰き止めてそれに形態を与える」(Dämmung und Gestaltung des historischen Lebensstromes) (KGA 17, 89, 92, 103)と言いつつ、「歴史を歴史によって克服する」とは、畢竟、「流れゆく歴史を現在というこの時点において、歴史哲学的な考察を通じて一旦堰き止め、そ

して未来へと方向づけた「建設の像」を示すことによって、新たな歴史の流れを形成すること」(75頁)なのである。

終章では、精神的同志であった歴史家マイネッケの言葉を引きながら、トレルチの《歴史主義》が歴史内在主義に閉塞するものでも、歴史相対主義に墮するものでもなく、むしろ超越的・信仰的次元に開かれたものであって、かくして「自己絶対化を回避する自浄作用をもつ」(78頁)ものであることが再確認される。

## 論文審査結果の要旨

### 1 審査の経過

審査請求論文に対する審査は、書面審査及び公開口述試験をもって行われた。口述試験は平成30年1月23日に実施された。口述試験では公開で本論文について著者の説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行なった。その結果、審査委員全員により合格と判定された。その後、平成30年2月15日北海学園大学大学院文学研究科委員会において、審議の上、無記名投票した結果、同論文の合格を決定した。

### 2 評価

本論文は、二十世紀初頭のドイツの神学界・哲学界において異彩を放っていたエルンスト・トレルチ (Ernst Troeltsch, 1865-1923) の「歴史主義」について考察したものである。トレルチは「歴史主義」を自ら定義して、歴史主義とは「人間とその文化や諸価値に関するわれわれの思惟の根本的歴史化」(die Historisierung unseres ganzen Wissens und Empfindens der geistigen Welt)、あるいは「精神世界についてのわれわれのすべての知識と感覚の歴史化」(die grundsätzliche Historisierung alles unseres Denkens über den Menschen, seine Kultur und seine Werte) である、と述べているが、著者はそこからトレルチの膨大な書物に散見する「歴史化」(Historisierung) 概念の用例をくまなく洗い出し、それらの分析・読解作業を通じて、「歴史主義」の問題がトレルチの神学と哲学に通底する、彼の学問的活動の最初期からの中心テーマであったことを実証したことが、まずもって評価できる。

次に、「歴史化」の動詞的用法としての“historisieren”と、その派生的用法としての、接頭辞「ent-」を伴った“enthistorisieren; Enthistorisierung”の用例に

着目した、文献学的な読解作業を通じて、「歴史化を惹き起こす主体」と「歴史化される対象」との間に、一種の「自己回帰的」な循環作用があることを指摘したことは、本論文の一番の学問的功績である。トレルチの畏友の歴史家マイネッケが、歴史主義を「みずからの尾に噛みつく蛇」に譬えたことはよく知られているが（Vgl. F. Meinecke, *Werke*, Bd. IV, 215）、著者は概念と用語の入念な用例分析と、トレルチの著作に関するスポット的に深い解釈によって、トレルチの《歴史主義》においても、「歴史学化」と「脱歴史化」という、類似の自己回帰的＝円環的構造がみられることを、説得力をもって論証している。かかる歴史主義の自己回帰的・円環的性格の指摘は、従来のトレルチ研究に新しい光を投ずるものとして、いくら高く評価されてもされ過ぎることはない。

さらに、トレルチが主唱しかつ用いた「歴史学的方法」が、通常言われる「批判」、「類推」、「相関」以外に、「人格性と主体性」という第四の原則にも立脚するものであり、かくして信仰的・超越的次元に開かれている、ということも指摘したことも、学問的にも重要である。なぜなら、そのことがトレルチの《歴史主義》をいわゆる「悪しき歴史主義」——「歴史内在主義」や「歴史相対主義」など——から区別するからである。

これらの点と密接に関連しているのは、「歴史を歴史によって克服する」という有名なモットーに関する、著者のオリジナルな解釈である。本審査委員会の主査は、かつてそれを「歴史主義の内在的超越」を表すものだと説いたが（安酸敏眞『歴史と解釈学—《ベルリン精神》の系譜学—』262頁以下）、著者はトレルチの《歴史主義》のなかに自己回帰的＝円環的構造があることを指摘したうえで、異なった角度からこのモットーを次のように解釈する。すなわち、「歴史を歴史によって克服する」とは、前述したように、「流れゆく歴史を現在というこの時点において、歴史哲学的な考察を通じて一旦堰き止め、未来へと方向づけた「建設の像」を示すことによって、新たな歴史の流れを形成すること」であると。著者のこの解釈は、従来のさまざまな解釈（レントルフや小柳の解釈も含む）を補完するだけでなく、ある意味ではそれらに見直しを迫るものとして、トレルチ研究を一步前に進める意義を有している。

しかし文献学的観点からすれば、若干の軽微な問題点も指摘できる。考察対象として取り上げられたトレルチの文献は、彼の膨大な著作の一部に過ぎず、また参照されている二次文献も限定された範囲にとどまっている。とりわけトレルチの前半生における専門分野であった神学に関しては、信仰面ならびに教理面で共感的に理解しがたいからであろうか、「キリスト教の絶対性」や「キリスト教の本質論」を

扱った第二章の叙述は、特定の二次文献に一面的に依拠しているように思える記述も見出される。第三章にも類似の問題点が見られる。しかしこれらの問題点は、本論文の価値を決定的に左右するものではないので、目くじらを立てるほどでもない（但し、将来単行本として刊行する際には、そういう箇所の手直しが望ましい）。

全体的に見て、本論文は難解な部類に属するトレルチの《歴史主義》を、ドイツ語原典に即しながら意欲的かつ独創的に考察したものとして、本邦における課程博士の標準的レベルは難なくクリアしていると判定できる。

以上の論文審査並びに最終試験の結果にもとづき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格があるものと認める。

### 3 学内の手続き

以上の博士論文は、北海学園大学大学院委員会での報告、承認に先立ち、本研究科では、次の手続きを踏んだ。

平成 29 年 12 月 11 日に、博士学位請求論文が提出された。

平成 29 年 12 月 14 日に、博士学位論文審査委員会が設置された。

平成 30 年 1 月 23 日、文学研究科博士（文学）学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、最終試験を行い、公開で本論文について著者の説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行なった。その結果、審査委員全員により合格と判定された。

平成 30 年 1 月 30 日～平成 30 年 2 月 6 日、本研究科委員会の委員に対し、博士学位請求論文が公表された。

その後、平成 30 年 2 月 15 日北海学園大学大学院文学研究科委員会において、審議の結果、無記名投票の上、同論文を合格と決定した。平成 30 年 3 月 7 日、北海学園大学大学院委員会において、同論文に関する文学研究科委員会の審査経過ならびに論文要旨が報告、承認され、同年 3 月 21 日、博士（文学）の学位が授与された。